



千葉県 TEACCH プログラム研究会
2021 年 9 月 3 日 (金) 第 110 号

「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県 TEACCH プログラム研究会広報部

ホームページ：<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>

事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS 内

TEL :043-227-8557



自閉症の生涯「ゆいかごから墓場まで」考えてみよう

社会福祉法人横浜やまびこの里

相談支援事業部 部長 志賀 利一

今回は自閉症支援・研究の変遷と、自閉症のある方の生涯をライフステージに分け、その時期の支援のポイント等についてご講演いただきました。

第1部「自閉症支援・研究の変遷」について

自閉症研究には歴史があり、日本でも最高齢は80歳になろうとしている。しかし、「自閉症の生涯」を語るのは決して簡単ではない。その理由は、自閉症の概念が非常に広いためである。21世紀に入り、スペクトラムの概念が広がることで、自閉症としての支援を考えた方が適切だと考えられる人たちが拡大した。概念の広がりと共に、家族支援のあり方も複雑になっている。

第2部「カズさんの生涯（架空の事例）」について

【ライフステージ1（出産→学校入学）「子どもの特徴的な行動を理解する時期」】

一般的に自閉症の顕著な特徴が最も現れる時期。保護者は、子どもの行動の背景にあることを少しずつ理解し、それに応じた対応を行い、少しずつ改善するといった成功体験を持ち自信をつけることがもっとも大切。障害について経験則かつ論理的に理解する。

【ライフステージ2（学校入学→小学校中学年）「子どもの行動を予測する時期」】

子どもの外出時のトラブル等から「障害」ということばの重みを感じる場合もあるが、将来の予測、こういう状況ではこうなるだろう、こういう環境が得意又は苦手だと理解できるようになる。事前の準備をして新しい活動に挑戦してみることが大切である。

【ライフステージ3（高学年→義務教育終了）「安定した日常生活の確立の時期」】

この頃が人生のターニングポイント。学校や家庭で学習してきたことが「将来、日常生活でどのように役立つか」という視点から見つめ直すことが大切である。情報機器の積極的な活用も大事である。

【ライフステージ4（後期中等教育→成人式）「労働生産性見極めの時期」】

学校卒業後の進路先とそこでの特徴を大まかに理解し高校（高等部）入学段階で家族・本人が共通の目標を持つことが大切。実際の進路は現実的な選択を迫られることも事実だが、卒業後の生活は、卒業時だけでなく何度か検討できる時代でもある。

【ライフステージ5（成人式→人生の折り返し）「身体的にも心理的にも健康で、最も活動的な時期」】

四つのメジャー領域「働く（就労・日中活動）、暮らす（住まいの場）、お金（収支とその管理）、健康（大切な健康習慣）」をしっかりと整えることが大切。特に、将来にむけ適度で継続的な運動と定期的な健康診断は重要である。

【ライフステージ6（35歳→中年期）「身体機能の老化に対応する時期、かつ親が介護状態に至る可能性が高まる時期」】

親が担ってきた支援のコーディネーター役を誰か別の人に引き継ぐことを考え始めることが大切である。

【ライフステージ7（中年期→老年期）「高齢知的障害者問題を考えていく時期」】

心身の機能の低下を見極め①引退時期②権利の擁護とその保障③住まいの選択④高齢者福祉制度への引継ぎを考えていくことが大切。その方を深く理解し、引継ぎのツールにもなるライフストーリーワーク（過去の棚卸し）を行うことも推奨される。

志賀先生が最後にお話しになった「将来幸せな人生を送るためのステップアップだけでなく、最後まで穏やかに過ごすという視点も大切」という言葉が印象的でした。支援者として関わることができるのは生涯の一部分ですが、だからこそ、その時期には何が大切なのか理解したうえで支援し、次のライフステージの支援者にしっかりバトンを渡していくことが肝要なことを改めて感じています。

第3回連続セミナー講師 中山 清司先生の著書等御紹介



自閉症への親の支援—TEACCH 入門 -

エリック ショプラー (著), Eric Schopler (原著), 田川 元康 (翻訳), 新沢 伸子 (翻訳), 中山 清司 (翻訳), 梅永 雄二 (翻訳) 黎明書房 2003.4

こんなとき、どうする?発達障害のある子への支援 中学校以降 (特別支援教育をすすめる本)

内山 登紀夫 (監修), 中山 清司 (編集) ミネルヴァ書房 2009.3



青年期自閉症へのサポート—青年・成人期の TEACCH 実践 —

梅永 雄二 (著), 中山 清司 (著), 西尾 保暢 (著), 志賀 利一 (著), 佐々木 正美 (監修) 岩崎学術出版社 2004.8

令和 3 年度千葉県 TEACCH プログラム研究会第4回連続セミナーのお知らせ

配信期間: 10月1日(金)~10月24日(日) ※申込締切日: 9月24日(金)

視聴会日時: 10月2日(土) 14:00~15:30 (受付開始 13:45~)

視聴会場: 千葉県教育会館203会議室

演 題: 「セクシャリティの適切な学習のために必要なこと~学んで慣れて伝える~」

講 師: 平木 真由美 氏 (京都市立総合支援学校支援部医療福祉コーディネーター)

～ 講師 平木真由美先生のご紹介 ～

川崎医療福祉大学医療福祉学研究科を修了され、2017 年より、京都市立総合支援学校で医療福祉コーディネーターとして勤務されています。予てから“人間と性”教育研究協議会でご活躍され、現在は、京都サークル代表としてますますご活躍中。看護師・養護教諭・社会福祉士・自閉症スペクトラム支援士の資格も取得されています。

【編集後記】

今年の夏、東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会が開催されました。大会は「すべての人が自己ベストを目指し(全員が自己ベスト)」「一人ひとりが互いを認め合い(多様性と調和)」「そして、未来につなげよう(未来への継承)」の三つを基本コンセプトとしていました。選手の頑張りや姿勢に感動するとともに、「多様性や共生社会」について以前より身近に感じた方も多かったのではないのでしょうか。「そのことについて知らない」と理解できない」ということは、世の中にたくさんあります。今回のオリパラ大会がきっかけになり、人々の理解がさらに進み、みなさんが普通に幸せに暮らせる社会に近づいてほしいと願っています。(金坂)